

〔新刊紹介〕

Edited by C.W. Newton,

Meteorology of the Southern Hemisphere

Meteorological Monograph vol. 13, No. 35, 1972,
Amer. Met. Soc., 263 pp, \$ 22. 00

南半球の気象あるいは気候というものを考えるとき、ひとつには素朴な意味で未知の現象それ自体への興味があるのは勿論であるが、もうひとつの見方として、従来豊富な観測により良く知られている北半球の気象あるいは気候を下敷きにして、南北両半球気象の異同を放射や海陸分布の差異に関連づけて考えることにより、地球大気の性質をより深く理解してゆこうという態度があり得よう。事実、最近の大気循環数値実験が海陸分布（地形、海水温分布）を含めた global model に発展したとき、まず問われるのが異なる条件を持った二つの半球の大循環形態をそれぞれ正しく表現しているかどうかである。

しかしながら南半球全体の実に81%が海洋に覆われていることは、必然的に観測上のきびしい制限となり、従来南半球の climatological な記述が北半球のそれに比して著しく遅れている原因ともなっていた。

このような困難な事情にも拘らず、IGY 以降の地道な観測・解析の積み重ねをもとに、最近急速に進歩した気象衛星観測の結果をも加えて、このたび標記「南半球の気象」がアメリカ気象学会のモノグラフの一巻として

出版された。これは C.W. Newton をリーダーとする NCAR の解析グループが、H. van Loon といううってつけの人物を得て成し得たタイムリーな企画であつたと言えよう。

内容の構成と執筆者を簡単に紹介すると；

1. Physical features (J.J. Taljaard), 2. Radiation budget (T. Sasamori, J. London, D.V. Hoyt), 3. Temperature, 4. Pressure, 5. Wind, 6. Cloudiness and Precipitation (以上いずれも H. van Loon), 7. Stratosphere (K. Labitzke, H. van Loon), 8. Synoptic meteorology (J.J. Taljaard), 9. Southern Hemisphere general circulation in relation to global energy and momentum balance requirements (C.W. Newton) となっている。

これらの各章の表題からも知られるように内容はきわめて comprehensive であり、過去の南半球に関する個々の論文の単なる総合報告というよりは original な色彩が強いのも大きな特長と言えよう。

1970年代から80年代にかけて、GARP (FGGE, SGGE) のみならず、長期予報や人間生存環境としての気候変動論等々、地球大気全体の理解の上で南半球に対する関心はますます高まってゆくことと思われる。本書の引用論文リストに日本人の手になる日本でなされた南半球研究論文が殆んど見当たらないのはいささか淋しく感ぜられるが、今後わが国においても南半球に積極的な目を向ける研究の増えることを期待したい。

(廣田 勇)

九州支部新役員

九州支部の新役員は48年7月23日次のとおり変更された

支部長	有住 直介 (福岡管区気象台)	理事	坂上 務 (九州大学(農))
常任理事	沢田 竜吉 (九州大学(理))		河村 四郎 (長崎海洋気象台)
	安藤 隆夫 (福岡管区気象台)		鎌本 博夫 (鹿児島地方気象台)
	長田 英二 (福岡管区気象台)		